

家庭における父親役割が子どもの母子密着及び 心理的自立に与える影響

内田 利広・高橋 はづき*

The Effects of Paternal Role Within the Home on Mother-Child Cohesion and
Children's Emotional Independence

Toshihiro UCHIDA and Hazuki TAKAHASHI*

Accepted June 27, 2012

抄録: 本研究では大学生を対象に、家庭での父親役割が母子密着と子どもの心理的自立に与える影響を調べた。父親役割を子どもに対する直接的なものと、家族全体や母親を介した間接的なものの両面から捉えるために、酒井(2004)の作成した父親役割尺度を用いた。

大学生 377 名(男性 176 名, 女性 191 名)を対象に質問紙調査を行い, 分析した。その結果, 父親役割の下位因子の母親との関わりが, 母子密着に正の影響を及ぼしていた。しかし, 父親役割から子どもの心理的自立への影響は, ほとんどみられなかった。

父親役割の影響を媒介する変数として想定した母子密着については性差がみられた。男性の心理的自立に対して母子密着の影響はみられなかった。しかし女性においては, 母子密着の正の影響が示された。以上のことから, 子どもの心理的自立には父親役割の直接的な影響はほとんどないが, 女性は, 母子密着を介して父親役割の間接的影響を受けている可能性が示唆された。

索引語: 父親役割, 母子密着, 心理的自立, 思春期・青年期

Abstract : The present study investigated, through a survey of university students, the effects of paternal role within the home on mother-child cohesion and child's emotional independence. Sakai's Father Role Scale (2001) was used to assess direct effects of paternal role on children and indirect effects as mediated via the mother or entire family.

Analysis of a questionnaire survey given to 377 university students (176 males, 191 females) revealed that paternal interaction with the mother, a sub-factor of paternal role involvement, had a positive influence on mother-child cohesion, however, little effect was observed of the paternal role on children's emotional independence.

As an intermediary variable of the effect of the paternal role, a gender difference was observed regarding mother-child cohesion. While mother-child cohesion did not affect emotional independence in male children, a positive effect was observed

* 八幡市教育支援センター

for female children's emotional independence. These findings suggest that paternal role has little direct effect on children's long-term emotional independence but that female children may be indirectly affected by paternal role via mother-child cohesion.

Key Words : paternal role, mother-child adhesion, emotional independence, adolescence

1. 問題と目的

これまでの家族研究は、J. ボウルビィ（1977）の愛着理論などの影響から、母子関係に重点を置いたものが多かった。日本での研究に目を向けても、母親の子どもに対する影響についての研究がほとんどで、父子関係を扱った研究は少ない。これは、育児は母親がおこなうもので、父親は家庭の外で働くものだという日本の伝統的な性役割観が大きく影響している（柏木、1993）。

しかし、現代においては、男女雇用機会均等法が制定され、女性の社会進出が進んでいる。女性が家庭を守り、男性が外で仕事をするというような伝統的な性役割観は薄れてきている。また、核家族化が進行していることもあり、男性の育児参加や家庭回帰の声が高まっている。これらのことから、父親研究の重要性は高まっており、子どもの成長において、父親の視点からの研究が必要であると考えられる。

1. これまでの父親研究

父親研究はここ 30 年ほどの間にその重要性が見直されてきた。国際的にも、1980 年代から「性役割」概念をめぐる研究を中心として、その後、様々な研究が行われるようになった。そこでは、男性・女性に対する社会・文化的期待やその認知、受容、あるいは葛藤に関する研究が行われ、その後はジェンダー心理学として、心理学の一分野として確立してきた（柏木、2008）。しかし、このジェンダー心理学が扱ってきたテーマは、ほとんどが女性の心理発達に関するものであった。それは、女性が様々な具体的な場面においてジェンダーに関する問題が多かったという背景があるが、ジェンダーの問題は女性だけであり、男性の心理発達は関係ないのか、といった疑問も提起されている（柏木、2008）。とりわけ夫婦関係や子育てにおいては、女性の心理学的問題は、男性の問題と表裏をなしていると考えられ、家庭における父親の役割やその位置づけについて検討することが必要になってくる。

母子関係の研究に比べると数は少ないが、父親の家庭における影響に関して様々な知見が得られている。それらを見ていくと、父親の子どもに対する影響は、直接的影響と間接的影響の二つがあると考えられる。直接的な影響についての研究では、子どもの性役割観の形成、独立意識、価値観形成への影響を調べたものなどがある。父親から子どもに対して、直接的な影響が様々な面でみられている。

父親の子どもへの影響のもうひとつは、間接的影響である。これは、父親の養育態度や家庭関与が母親の養育態度や家庭の雰囲気に影響し、結果として子どもに影響を与えるというものである。父親の家庭での態度が母親の育児不安に影響を与えるということや、幼い子どもの母子分離において、父親の働きかけが重要な役割を持っていること（中野、1996）がわかっている。

父親の役割を調べた酒井（2004）の研究では、思春期から青年期の子どもを持つ父親にインタビューをおこない、子どもだけでなく、妻や家族全体への関わりをみる父親役割尺度を作成している。その下位因子として、「子どもとの関わり」「母親との関わり」「父親の家庭関与」「リーダーシップ的役割」

「家庭内の緩衝機能」がある。「子どもとの関わり」が子どもとの二者関係を捉えた直接的影響であり、「母親との関わり」「家庭関与」「リーダーシップ的役割」「家庭内の緩衝機能」が三者関係を捉えた間接的影響にあたる。

2. 父親観の変化と間接的影響の重要性

父親の影響を考える上で、近年、父親観が変化していることは重要な問題である。伝統的な性役割観が根付いていた時代には、父親は家庭の中で権力を持った存在であった。それは父親が家庭の中で唯一、社会に出て働く存在だったことが大きく影響していた。そして、そのような父親には、男性性や社会性、道徳性を子どもに示すことや、子どもの反抗の対象となる役割が求められた。父親の直接的影響についての研究は、このような父親観に基づいていると考えられる。

しかし、現代日本では性役割の平等化にともない、父親のあり方も変化している。父親の権力は意識されることが少なくなり、社会性や道徳性を子どもに伝えるのは、父親だけの仕事ではなくなっている。また、男性性という概念も現代ではあいまいになってきている。このような父親観の変化から、父親に求められる役割も変化している。父親の間接的な影響に示されているような、母親を支えることで家族の安定を保ったり、母子関係に介入することで子どもに三者関係を意識させたりする役割である。現代日本では、このような間接的影響のほうが子どもの発達に重要な意味を持っていると考えられる。

3. 思春期の子どもの不適応

ところで、思春期の子どもの不適応行動には、不登校や引きこもり、摂食障害など様々なものがある。さらに、思春期の問題に続いて、青年期の若者にも、引きこもりや「ニート」、「パラサイトシングル」などと呼ばれる不適応を示す者がみられ、問題になっている。

思春期は、身体的・社会的な課題に直面する重要な時期であり、親の関わりが難しい時期だとされる（松平・三浦，2006）。また、思春期は「心理的離乳」が始まる時期であるともいわれる。子どもは、親とは異なる価値観を形成し、成長していくために心理的な自立が必要である。思春期の子どもは様々な不適応行動は、この心理的自立が阻害されることで、現れてきているのではないだろうか。

田村（1996）の研究や、多くの事例の中で、思春期の子どもの不適応の背景に同様の家族形態があることが指摘されている。それは、母子の距離が近く、父親が心理的に不在の父親不在・母子密着型の家族である。このような家族状況にある子どもは、心理的離乳をし、自立していくことが難しいと考えられる。

4. 子どもの心理的自立と父親の役割

ユングは母性と父性を「包む」役割と「切断する」役割としてとらえた。母性の原理は、良いものも悪いものも全て平等に包み込むものである。それに対し、父性の原理は、善悪、上下、主観と客観などを切断し、分割するものである。菅野（1987）は、この考え方を子どもの発達とからめ、父性はそれまでの母子一体の状態にある子どもを母性から引き離し、分離・自立を促していく機能であるとした。このことから、父親の心理的不在が子どもの母子分離を阻害し、子どもの不適応につながっていると考えられる。

これに関連して、子どもの父親存在感認識の情緒的自立への影響を調べた松平・三浦（2006）の研究がある。この研究では、中学生の子どもは父親存在感認識が情緒的自立へ影響するかどうかを調べている。しかし結果は、父親への否定的な感情の因子が情緒的自立との関連を示したのみで、父親のしつけや父親と子どものコミュニケーション、父親の子どもへの関心などの因子に関しては、影響を

見いだせなかった。つまり、子どもの情緒的自立には父親存在感認識以外に、影響を持つ変数が存在していることを示しているのである。これは、父親の影響が直接的なものよりも、間接的なものである可能性を示唆していると考えることができる。

以上のことから、本研究では、子どもが思春期のころに、父親が家庭でどのような役割を担っていたのかを調べるとともに、それが青年期の子どもの心理的な自立にどのように影響するかを検討したい。父親の影響を直接的なものと間接的なものとに分けて捉えるために、酒井（2004）の尺度を用いる。この尺度では、子どもとの一対一の関係だけでなく、母親や家族全体に対する父親の行動もたずねることができる。また、父親の影響を媒介するものとして、母子密着の要因を検討する。なお、本研究では大学生に調査をおこない、思春期にあたる中学生のころ、父親がどのような役割を担っていたか回想してもらう。このような方法をとることで、回答に実際の父親の行動と差が生じる可能性はあるが、子どもが認知した父親の行動という観点は重要だと考える。また、大学生に回想してもらうことで、思春期の只中にいる子どもよりも、父親の行動をある程度、客観視できるのではないかと考えられる。

2. 予備調査

目的

酒井（2004）が作成した父親役割尺度は、父親へのインタビューから作成され、「子どもとの関わり」、「母親との関わり」、「父親の家庭関与」、「リーダーシップ的役割」、「家庭内の緩衝機能」の5因子からなっている。しかし、「家庭内の緩衝機能」については一貫した構造が見出されておらず、項目内容の検討が必要であると考ええる。また、今回の調査では、父親の母親との関わりにも重点を置いているため、「母親との関わり」因子の項目についても検討し、項目内容を選定する。

方法

京都府下の大学院生 21 名に対し、質問紙法で調査をおこなった。「あなたが中学生のとき、あなたのお父さんは家庭内でどのような役割を担っていましたか。もしくは、一般的に、中学生の子どもを持つ父親が担うべき役割にはどのようなものがあると思いますか。」とたずね、自由記述で回答を求めた。2011 年 5 月に実施した。

結果

質問紙を 25 名に配布し、そのうち 22 名から回収した。そこから父親の役割として、89 の回答が得られた。これらを主に KJ 法の分析方法に従い、類似した項目でまとめた（表 1－1）。そしてその項目を酒井の作成した父親役割尺度の下位因子にふりわけた。その結果、父親役割尺度に 7 項目追加し、計 36 項目となった（表 1－2）。

表 1－1 KJ 法による分析結果

カテゴリー	ラベル	内容
子どもに関すること	子どもの気持ちを尊重する	子どもの夢を後押しする，子どもの主体性を大切にする
	子どもの話をきく	子どもの(進路)相談にのる，子どもの話をきく，子どもの興味を知る
	子どもの勉強をみる	子どもに勉強を教える，夏休みの工作を手伝う
	子どもの遊び相手になる	
	子どものしつけ	悪いことをしたら厳しく叱る，良いことをしたらほめる
	「社会」というものを教える	社会の厳しさを教える，社会の規範を感じさせる
	「男性」としてのモデル	男性・父親のモデルとなる，父＝男性視点からの像
母親に関すること	母親の話をきく	母親の相談にのる，愚痴をきく，話をきく
	母親のフォロー	母親だけでは子どもが反抗するときに叱る，母親ができない力仕事
	家事の手伝い	
	子どもと母親のけんかの仲裁	
	叱るorなだめる(母親との補完)	
家族全体に関すること	家族のリーダーとしての存在	家族をまとめる，一家の大黒柱，リーダーシップをとる，厳格な存在
	家族の重要なことに関する決定	重要な事柄の最終決定，お金に関わることの決定
	家族の経済的支え	お金を稼ぐ，家族を養う，仕事をする
	家族が一緒にいる時間を作る	家族サービスをする，家族で出かける計画を立てる
	家族を和ませる	家族が笑いそうなことをする
	家庭内での物理的な仕事	家族で出かけるときの車の運転，家の掃除，力仕事，近所づきあい
	祖父母(父親の親)の世話	祖母の世話，祖父の話し相手・出かけるときの車の運転

表 1－2 父親役割尺度（追加項目は網掛け表記）

子どもとの関わり

- 1 お父さんは、仕事が休みの日には、できるだけ私につきあってくれた
- 2 お父さんは私の進路相談にのってくれた
- 3 お父さんは学習について私の質問に答えてくれた
- 4 お父さんは私の悩み事の相談にのってくれた
- 5 お父さんは私の帰りが遅いときには迎えにきてくれた
- 6 お父さんは、私に自分のこれまでの体験談や失敗談を話してくれた
- 7 お父さんは自分の仕事の話を私にしてくれた
- 8 お父さんは私に自分の考える夢や生き方について話してくれた
- 9 お父さんは私に、あいさつや片付けなど日常的な礼儀習慣について注意した
- 10 お父さんは私が悪いことをしたときは、きちんと叱ってくれた
- 11 お父さんは私の興味、関心のあることを知ろうとしていた
- 12 お父さんは私が失敗をした時なぐさめてくれた

母親との関わり

- 13 お父さんは、お母さんと子どものことについて話をしていた
- 14 お父さんは子どもの心配ごとに関するお母さんの相談にのっていた
- 15 お父さんはお母さんの日常生活の不平や不満をよくきいていた
- 16 お父さんは、お母さんに仕事や外での出来事をよく話していた
- 17 お父さんは家事の手伝いをしていた
- 18 お父さんはお母さんと二人ででかけることがあった

父親の家庭関与

- 19 家族みんなで何かするといった家族行事を行っていた
- 20 家族の誕生日やお祝い事があると家族みんなでお祝いした
- 21 家族みんなで旅行に行った
- 22 家族そろって食事や買い物に行った
- 23 お父さんはできるだけ家族と一緒に過ごす時間を作っていた

リーダーシップ的な役割

- 24 家庭内でのお父さんの発言力は大きかった
- 25 お父さんの意見は、家族の中で尊重されていた
- 26 なにか困った問題が起こった時、家族はお父さんを頼りにしていた
- 27 家族の中でお父さんは支柱的存在だった
- 28 家族の中で大事なことを決める時、最終的な決定権はお父さんが持っていた
- 29 家族の対外的な問題に対して、父親は家族を代表する責任を持っていた
- 30 お父さんは仕事をしてお金を稼ぎ、経済面で家族を支えていた

緩衝機能

- 31 お母さんと私が言い争いになったときは、陰に回ってそれとなく両者をなだめてくれた
- 32 お母さんが私に注意している時、お父さんも口をはさんでくれることがあった
- 33 お父さんも一緒になって家族で冗談を言い合った
- 34 お母さんとお父さんが一緒になって私を叱ることはなかった
- 35 お父さんはユーモアのある言動で家族を笑わせるムードメーカーだった
- 36 お父さんは、お母さんが叱るときは優しく諭し、お母さんが優しく諭すときは厳しく叱った

3. 本調査

目的

予備調査で作成した父親役割尺度を用いて、子どもが中学生のころに、家庭内で父親がどのような役割を担っていたのかを調べる。そして、父親役割から現在の青年期の子どもの母子密着度、心理的自立への影響を検討するために、以下の仮説を立てた。

仮説1：父親役割の下位尺度の中で、「母親との関わり」が母子密着に負の影響を与える。

仮説2：子どもが中学生のころの父親役割は、青年期の子どもの母子密着、心理的自立に影響している。

仮説3：父親役割の影響よりも、母子密着のほうが子どもの心理的自立に与える影響は大きい。

方法

調査対象は京都府下の大学生で、2011年7月から10月にかけて、質問紙調査を集団で実施した。393部回収し、回答に不備のなかった377名を分析の対象とした。有効回答率は96.2%であった。質問紙の内容は以下の通りである。

- 1) フェイスシート：性別、年齢、出生順位、中学生の時の家族構成、現在の同居家族親、両親の雇用形態についてたずねた。
- 2) 父親役割尺度：父親が家庭でどのような役割をとっているかをたずねる尺度で、酒井（2004）の作成した29項目に、予備調査で作成した7項目を追加した、計36項目からなる。「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」「まったくあてはまらない」の5件法で行った。
- 3) 母子密着尺度：藤田（2003）が作成した母子密着尺度（全28項目）の内、14項目を抜粋して使用した。本来は4因子構造が想定されている尺度だが、これまでの先行研究から、1因子構造が妥当であると考えられたため、負荷量の高かった項目を抜粋した。「非常にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「まったくあてはまらない」の7件法でおこなった。
- 4) 心理的自立尺度（PJS-2）：高坂・戸田（2007）が作成した心理的自立尺度全30項目を使用した。「非常にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」「まったくあてはまらない」の7件法でおこなった。

結果

1. 回答者の属性

フェイスシートの項目を集計したところ、表2の結果が得られた。

表2 フェイスシートの集計結果

性別	回答数	年齢	回答数(%)	出生順位	回答数(%)	中学生時の同居家族	回答数(%)
男性	176	18歳	33(8.8)	1	209(55.4)	核家族	248(65.8)
女性	191	19歳	155(41.1)	2	119(31.6)	母子	25(6.6)
合計	377	20歳	122(32.4)	3	41(10.9)	父子	4(1.1)
		21歳	39(10.3)	4	6(1.6)	拡大家族	89(23.6)
		22歳以上	28(7.4)	5	2(0.5)	その他	10(2.7)

現在の同居家族	回答数(%)	父親の就労形態	回答数(%)	母親の就労形態	回答数(%)
一人暮らし	151(40.1)	フルタイム	336(89.1)	フルタイム	133(35.3)
親と同居	211(56.0)	パートタイム	4(1.1)	パートタイム	133(35.3)
その他	15(3.9)	専業主夫	1(0.3)	専業主婦	95(25.2)
		その他	20(5.4)	その他	10(2.7)

2. 各尺度の因子分析結果

1) 父親役割尺度の因子分析

天井効果、フロア効果のあった5つの項目（A8, A12, A23, A34, A35）を削除し、主因子法・プロマックス回転で、因子数を5に固定して分析をおこなった。複数の項目に高い負荷量を示した6項目（A4, A7, A9, A19, A21, A25）を削除し、再度分析した結果、25項目5因子構造となった（表3）。

先行研究で想定されていた5因子とは異なる結果となったため、新たに命名した。第1因子は、“お母さんと言い争いになったとき、お父さんは後でそっとなぐさめてくれた”、“お父さんは私が失敗した時なぐさめてくれた”など、やさしい父親像をあらわす項目の因子負荷量が高かったため、「情緒的関わり」と命名した。第2因子は、“お父さんの意見は家族の中で重みを持っていた”など家族内での父親の立場の強さや、リーダーシップを表す項目の因子負荷量が高かったため、「リーダーシップ」と命名した。第3因子は、“お父さんはお母さんに仕事や外での出来事をよく話していた”など父親と母親の関わりに関する項目の因子負荷量が高かったため、「母親との関わり」と命名した。第4因子は“お父さんは自分の仕事の話をしてくれた”など父親から子どもへの自己開示についての項目の負荷量が高かったため、「父親の自己開示」と命名した。第5因子は“お母さんに注意されているとき、お父さんも横から口をはさんできた”など子どもへの注意やしつけに関する項目の負荷量が高かったため、「注意・叱責」と命名した。

内的整合性の確認のため、アルファ係数を算出したところ、父親役割尺度全体では $\alpha = .92$ 、下位因子の「情緒的関わり」では $\alpha = .85$ 、「リーダーシップ」では $\alpha = .87$ 、「母親との関わり」では $\alpha = .82$ 、「父親の自己開示」では $\alpha = .81$ 、「注意・叱責」では $\alpha = .64$ となった。「注意・叱責」の因子が他の因子に比べやや低い値となったが、尺度全体とそのほかの因子では高い整合性が得られた。

表3 父親役割尺度の因子分析結果（下線の項目は予備調査で追加したもの）

	因子				
	1	2	3	4	5
父親の情緒的関わり（ $\alpha = .85$ ）					
6. お母さんと言い争いになったとき、お父さんはあとでそっと慰めてくれた	.81	-.19	-.08	.02	-.05
<u>26.</u> お父さんは私が失敗をした時なぐさめてくれた	.73	.00	-.02	.21	-.13
36. お父さんは仕事が休みの日には、できるだけ私につきあってくれた	.71	.04	-.02	.09	-.13
<u>5.</u> お父さんは、お母さんが叱るときは優しく諭し、お母さんが優しく諭すときは厳しく叱った	.57	.04	-.11	-.04	.19
32. お父さんは私の帰りが遅いとき、迎えにきてくれた	.55	-.01	-.01	.10	.03
<u>15.</u> お父さんは家事の手伝いをしていた	.49	-.22	.31	-.09	.03
1. お父さんは進路の相談にのってくれた	.47	.16	-.07	.21	.10
11. お父さんはできるだけ家族と一緒に過ごす時間を作っていた	.46	.16	.20	.06	-.07
33. お父さんは勉強のわからないところを教えてくれた	.38	.16	.03	-.04	.02
父親のリーダーシップ（ $\alpha = .87$ ）					
10. お父さんの意見は家族の中で重みを持っていた	-.10	.94	-.03	-.02	-.01
30. お父さんは私たち家族を代表する責任を持っていた	.04	.82	.03	-.04	-.06
18. 家族の中で大事なことを決める時は、最後はお父さんの意見で決まる	-.18	.80	.10	-.05	.03
3. お父さんは私たち家族の中心的な支えだった	.15	.70	-.09	.12	-.10
母親との関わり（ $\alpha = .82$ ）					
17. お父さんは、お母さんに仕事や外での出来事をよく話していた	-.24	-.05	.76	.33	-.02
<u>28.</u> お父さんとお母さんは二人ででかけることがあった	-.11	.12	.58	.05	-.03
31. お父さんは、お母さんの日常生活の不平や不満をよくきいていた	.33	-.01	.58	-.16	-.06
16. お父さんとお母さんは、2人でよく子どもたちのことについて話をしていた	.16	.01	.51	.10	.09
13. お父さんは私たち子どもについてのお母さんの相談にのっていた	.38	.09	.48	-.13	-.06
父親の自己開示（ $\alpha = .81$ ）					
24. お父さんは自分の仕事の話をしてくれた	.06	-.08	.09	.72	.06
27. お父さんは私に、自分のこれまでの体験談や失敗談を話してくれた	.17	.00	-.03	.69	.03
20. お父さんは私に自分の夢や生き方について話してくれた	.03	.13	.14	.53	-.01
父親の注意・叱責（ $\alpha = .64$ ）					
2. お母さんに注意されているとき、お父さんも横から口をはさんできた	-.13	-.12	.09	.12	.64
22. お父さんとお母さんに一緒におこられることはなかった	.06	.04	.16	-.05	-.55
14. お父さんに、あいさつや部屋の片付けなどについて注意された	.28	.10	.05	-.19	.52
29. 私が悪いことをしたとき、お父さんに叱られた	.09	.25	.07	.09	.40
因子間相関					
1	—				
2	.65	—			
3	.64	.54	—		
4	.59	.57	.56	—	
5	.24	.30	.38	.23	—

2) 母子密着尺度の因子分析

天井効果のあった項目を1つ削除し、13項目について主因子法・プロマックス回転で因子分析をおこなった。その結果、2因子構造となり、先行研究から想定していた1因子構造とは異なる結果となった。よってそれぞれの因子を新たに命名した。第1因子は、“私は、母に学校であったことや、仲間のことをよく話す”、“私は買い物などに母と一緒に出かけることがよくある”など母親とのコミュニケーションや、行動をともにするかといった物理的なことに関する項目の因子負荷量が高かった。そのた

め、「物理的母子密着」と命名した。第2因子は“私の元気がなさそうであつたら、私の母は私を励ましてくれる”，“母は私のことを常に思ってくれている”など母と子の心理的なつながりを表す項目の因子負荷量が高かったため、「精神的母子密着」と命名した（表4）。

内的整合性の確認のため、アルファ係数を算出したところ、母子密着尺度全体では $\alpha = .91$ ，下位因子の「物理的密着」では $\alpha = .86$ ，「精神的密着」では $\alpha = .87$ となり，十分な値が得られた。

表4 母子密着尺度の因子分析結果

	因子	
	1	2
物理的密着 ($\alpha = .86$)		
10. 私は、母に学校であつたことや、仲間のことをよく話す	.75	.07
3. 私は買い物などに母と一緒に出かけることがよくある	.75	.00
1. 学校であつた出来事や、友だちと話したことなどを母は毎日きいてくれる	.73	.02
13. 私が衣服を買うときは、母がついてきてくれることがよくある	.70	-.03
4. 私は母と、毎日何らかのコミュニケーションをとっている	.67	-.15
12. 母は私の友だちのことをよく知っている	.59	.21
2. 私の部屋に母が入ってきてても別に気にならない	.44	.21
精神的密着 ($\alpha = .87$)		
8. 私の元気がなさそうであつたら、私の母は私を励ましてくれる	-.08	.90
5. 母は私のことを常に思ってくれている	-.10	.78
7. 私は母の顔を見ると何となく安心できる	.14	.72
6. 私は、母の考えは何となくわかっているように思う	-.07	.72
11. 私が考えていることを母はよく知っている	.30	.51
9. 母が何かを探していたら私も一緒に探してあげる	.18	.48
因子間相関		
	1.00	2.00
	1	—
	2	.73

3) 心理的自立尺度の因子分析

主因子法・プロマックス回転で因子分析をおこなったところ，7因子構造となった。第1因子から第6因子までは，ほぼ先行研究と同じ結果となり，因子名はそのまま使用した。第1因子は「将来志向」，第2因子は「適切な対人関係」，第3因子は「価値判断・実行」，第4因子は「責任」，第5因子は「自己統制」，第6因子は「社会的視野」となった。第7因子は「社会的視野」と「責任」の逆転項目からなっており，これは「社会的責任感」と命名した（表5）。

内的整合性の確認のため，アルファ係数を算出したところ，心理的自立尺度全体では $\alpha = .92$ ，下位因子の「将来志向」では $\alpha = .95$ ，「適切な対人関係」では $\alpha = .85$ ，「価値判断・実行」では $\alpha = .85$ ，「責任」では $\alpha = .89$ ，「自己統制」では $\alpha = .73$ ，「社会的視野」では $\alpha = .84$ ，「社会的責任感」では $\alpha = .66$ となった。「社会的責任感」因子のアルファ係数がややほかの因子よりも低い値となったが，尺度全体とその他の因子では高い整合性が得られた。

表5 心理的自立尺度の因子分析結果

	因子						
	1	2	3	4	5	6	7
将来志向 ($\alpha=.95$)							
18. 将来に対する見通し・考えを持っている	.94	-.03	.00	-.04	.04	.01	-.03
17. 自分が将来何をしたいのかについて考えを持っている	.94	-.05	.01	-.04	.03	-.03	.00
16. 自分のこれからの生き方に明確な計画がある	.91	.07	-.01	-.06	-.03	.08	.11
15. これから自分がどのように生きていくか決めている	.90	-.01	.00	.00	-.01	.06	.04
4. 自分の将来の目標をしっかりと持っている	.88	.04	-.10	.07	-.04	-.05	.01
28. 将来のことをよく考えている	.72	.00	.01	.10	.05	-.02	-.07
適切な対人関係 ($\alpha=.85$)							
6. 他人の気持ちを思いやることができる	.05	.85	-.09	.04	-.05	-.05	.03
23. 周りの人と良い関係を維持することができる	-.01	.72	.20	-.15	-.04	-.04	-.14
7. 周りの人と協力して物事に取り組むことができる	.05	.71	-.10	.02	-.03	-.09	-.16
2. 相手の人の立場を考え、接することができる	-.05	.70	.01	.07	-.05	.21	.11
10. 相手の気持ちを察して、適切な対応ができる	-.09	.57	.00	.22	.14	-.07	.05
3. 状況に合わせて感情を適切にコントロールすることができる	.05	.42	.09	-.04	.30	.08	.06
価値判断・実行 ($\alpha=.85$)							
21. 自分一人で物事を決めることができる	-.08	.00	.83	.01	-.02	-.03	.03
22. 自分の意見をはっきりと言うことができる	.01	.06	.79	-.02	-.13	.02	-.02
26. 周りの人の意見に流されずに行動したり考えたりすることができる	-.09	-.08	.72	.00	.10	.05	.07
29. 自分のことは自分で判断することができる	.16	-.03	.67	.14	-.09	-.04	-.05
5. 自分が正しいと思った道を突き進むことができる	.32	.03	.50	.01	.01	-.07	-.07
責任 ($\alpha=.89$)							
11. 自分が決めたことには責任が持てる	-.02	-.08	.15	.82	-.01	-.04	.03
13. 責任ある行動がとれる	.07	.01	-.02	.78	-.01	.07	.00
8. 自分が言ったことに責任を持つことができる	.04	.17	-.12	.77	.00	-.02	.00
27. 責任感がある	-.07	.07	.13	.70	-.01	.04	-.04
自己統制 ($\alpha=.73$)							
19. 一時の感情に左右されない	.07	-.08	-.03	.07	.74	.04	.04
12. つい感情にまかせて行動してしまう	.02	.02	.23	-.02	.72	.16	.14
20. 悲しみ、怒りなどの感情を自分で落ち着かせることができる	.01	.06	.22	-.17	.69	.04	-.02
9. 常に落ち着いている	-.06	.05	.11	.19	.36	.06	.13
社会的視野 ($\alpha=.84$)							
14. 世間の情勢に詳しい	-.02	-.03	-.04	.03	-.03	.94	-.05
1. 世界や社会の出来事についてよく知っている	.05	-.01	.02	.00	-.05	.76	-.08
社会的責任感 ($\alpha=.66$)							
24. 社会の出来事には関心がない	.03	.07	.04	.00	-.09	-.23	.75
30. 社会の出来事には自分は関係ないと思う	.03	-.19	.07	.12	.02	.03	.66
18. 将来に対する見通し・考えを持っている	-.01	.06	-.19	-.24	-.05	.09	.49
因子間相関	1.00	2.00	3.00	4.00	5.00	6.00	7.00
1	—						
2	.37	—					
3	.52	.50	—				
4	.42	.60	.67	—			
5	.25	.51	.46	.48	—		
6	.30	.28	.44	.39	.33	—	
7	.06	.10	.13	.01	.00	.12	—

4. 回答者の性別による差の検定

父親役割, 心理的自立, 母子密着, の値に男女差があるかどうかを確認するためt検定をおこなった(表6)。父親役割では「情緒的関わり」「母親との関わり」「父親の自己開示」において有意に女性のほうの得点が高かった(情緒的関わり: $t = 2.89$, $p < .01$, 母親との関わり: $t = 3.82$, $p < .001$, 父親

の自己開示 : $t = 2.48$, $p < .05$ 。母子密着ではすべての得点で、女性の方の得点が高かった（母子密着 : $t = 9.14$, $p < .001$, 物理的密着 $t = 9.52$, $p < .001$, 精神的密着 : $t = 6.75$, $p < .001$ ）。そして、心理的自立では「社会的視野」において男性のほうの得点が有意に高かった ($t = -4.67$, $p < .001$)。

表 6 父親役割, 母子密着, 心理的自立の t 検定結果 (男女差)

尺度／因子	男性		女性		
	n=176		n=191		
	平均値	SD	平均値	SD	t値
父親役割尺度	3.03	0.74	3.25	0.75	n.s.
情緒的関わり	2.87	0.87	3.14	0.89	2.89**
リーダーシップ	3.36	0.99	3.50	1.01	n.s.
母親との関わり	3.03	0.92	3.42	0.98	3.82***
父親の自己開示	2.89	1.11	3.18	1.11	2.48*
注意・叱責	2.98	0.84	3.06	0.98	n.s.
母子密着尺度	4.31	0.99	5.32	1.12	9.14***
物理的密着	3.97	1.20	5.21	1.30	9.52***
精神的密着	4.71	0.99	5.45	1.11	6.75***
心理的自立尺度	4.79	0.75	4.69	0.70	n.s.
将来志向	4.79	1.33	4.65	1.35	n.s.
適切な対人関係	5.07	0.88	5.23	0.76	n.s.
価値判断・実行	5.02	1.01	4.82	1.02	n.s.
責任	4.93	1.10	4.92	0.91	n.s.
自己統制	4.30	1.03	4.11	1.03	n.s.
社会的視野	3.98	1.27	3.40	1.18	-4.67***
社会的責任	4.84	1.21	4.75	1.00	n.s.

p***<.001, p**<.01, p*<.05

5. 父親役割が母子密着に与える影響

次に、父親役割が母子密着にどのような影響を与えているかをみるために、父親役割を独立変数、母子密着を従属変数として、強制投入法による重回帰分析をおこなった。その結果、決定係数はあまり高くないものの、父親役割の「母親への関わり」の因子において有意な影響が示された (表 7, 図 1)。

表 7 父親役割が母子密着に及ぼす影響

説明変数	β
父親の情緒的関わり	.130
父親のリーダーシップ	-.058
母親との関わり	.174*
父親の自己開示	.137
父親の注意・叱責	-.072
決定係数(R2乗)	.110***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

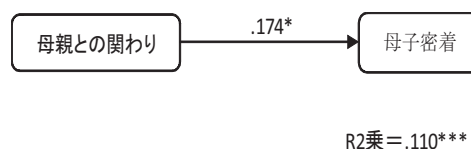


図 1 父親役割が母子密着に及ぼす影響

7. 父親役割と母子密着が、子どもの心理的自立に与える影響

父親役割と母子密着を独立変数、心理的自立を従属変数として、強制投入法による重回帰分析をお

こなつた。その結果、決定係数は低く、 β も .20 未満であつた。このことから、父親役割と母子密着から心理的自立への影響はほとんどないと考えられる。

これまでの分析において、父親役割と母子密着について男女差が確認されていることから、回答者を男女にわけて重回帰分析をおこなつた（表 8）（図 2-1, 2-2）。

その結果、男性においては決定係数が低く、父親役割と母子密着から心理的自立への影響があるとはいへなかつた。しかし、その中で“リーダーシップ”の影響は 5%水準で有意であり、男性の心理的自立には父親のリーダーシップ行動がやや影響している可能性が示唆された。

女性においては、ある程度の決定係数が示され、父親役割と母子密着から心理的自立への影響関係が考えられる。その中で、母子密着の影響は 1%水準で有意であり、女性の心理的自立に対して、母親との密着した関係が正の影響を及ぼしていると考えられる。また、父親の情緒的関わり、母親への関わりの影響は有意傾向にあつた。 β の値はあまり高くないが、わずかながら正の影響を及ぼしている可能性が考えられる。そして、父親の注意・叱責に関しては有意傾向で、負の影響を及ぼしている可能性が示唆された。

表 8 父親役割と母子密着が心理的自立に及ぼす影響（男女別）

説明変数	β	
	男性	女性
母子密着	—	—
物理的密着	0.106	-0.016
精神的密着	-0.01	.311**
父親役割	—	—
情緒的関わり	0.016	.192+
リーダーシップ	.256*	0.122
母親との関わり	-0.062	.190+
父親の自己開示	-0.05	-.165+
注意・叱責	-0.094	-.136+
決定係数(R ²)	0.053	.223***

***p<.001, **p<.01, *p<.05, .05<+p<.10

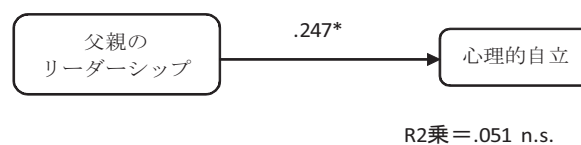


図 2-1 父親役割と母子密着が心理的自立に及ぼす影響（男性）

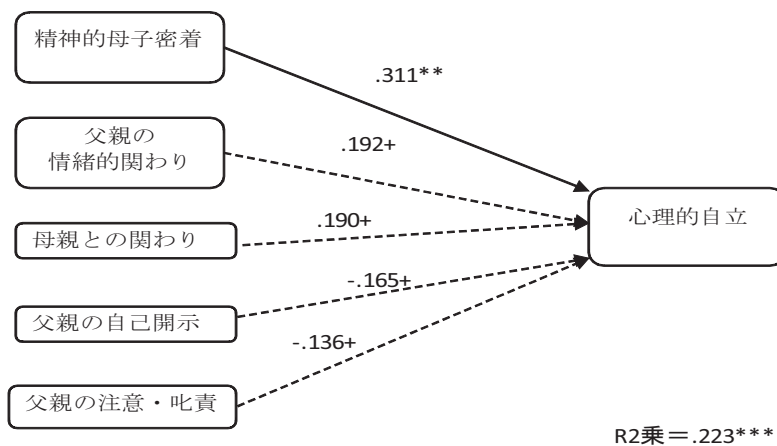


図 2-2 父親役割と母子密着が心理的自立に及ぼす影響（女性）

4. 考察

1. 父親役割尺度について

本研究での分析の結果、父親の役割は「情緒的な関わり」、「リーダーシップ」、「母親との関わり」「自己開示」「注意・叱責」の 5 つの次元で認知されていた。この結果は、酒井（2004）の父親役割尺度の因子構造とは異なるものだった。酒井の示していた「父親の家庭関与」、「家庭内の緩衝機能」「子どもへの関わり」の因子は見出されず、これらの因子に寄与していた項目はそれぞれ別の因子におさまった。

今回、酒井の提示した因子構造と異なる結果となったのにはいくつかの要因が考えられる。1 つは、独自に作成した項目を追加した影響である。7 項目追加し、分析の中で削除したものもあるが最終的に 4 項目残っており、その影響があると考えられる。もう 1 つは、今回の調査対象者が大学生だったことである。酒井の研究では中学生の子どもが調査対象者とされていたため、この違いが影響した可能性がある。

「家庭内の緩衝機能」は父親のさりげない気配りによって、家庭の雰囲気を明るく落ち着いたものにする役割である。酒井の研究では、父親自身がこの役割を重視している傾向にあったとされている。また、様々な研究で家庭の雰囲気が子どもに与える影響が述べられており、父親の緩衝機能は重要な役割であると言える。それに関わらず、酒井の研究でも本研究でも、この因子は見出されなかった。これは緩衝機能としての父親の行動が、子どもに認識されにくいためではないだろうか。緩衝機能はリーダーシップなどの役割と比べて、さりげない行動であるため、役割として捉えられにくいのかもかもしれない。今後、父親の役割を考える際には、この緩衝機能をどのような項目で捉えるかの検討が必要だと考える。

2. 父親役割、母子密着、心理的自立尺度得点の性差について

それぞれの尺度得点の平均値を男女別に見たところ、父親役割の 3 つの下位因子と母子密着、心理的自立の社会的視野について有意な差がみとめられた。つまり、男性よりも女性のほうが父親の役割を高く評価していたのである。また、母子密着についても女性のほうが得点が高く、母子のつながりは男性よりも女性のほうが強いといえる。

親に関する感情の変化を調べた倉光（1987）の調査で、女性も男性も思春期ごろには親へのマイナスの感情が増加し、女性は年齢を重ねるにつれて回復するが、男性はあまり回復しないということが分かっている。本研究で、父親の役割を女性のほうが高く評価していたことや、母親との密着が強かったことは、倉光の調査結果に現れているように、男女で親への感情の変化の仕方が異なることが影響しているのではないだろうか。

心理的自立尺度に関しては、ほとんど性差はみられなかったが、「社会的視野」の因子においてのみ、女性よりも男性のほうの得点が高かった。高坂・戸田の先行研究でも、心理的自立尺度全体では性差は見られなかったが、「社会的視野」因子に関しては、男性のほうが高い傾向にあった。このことについて、高坂・戸田（2007）は、男性と女性では社会適応上望ましい自立のあり方が異なっており、それが現れているのではないかとしている。本研究の結果も、これを反映したものだと考えられる。

3. 父親役割の母子密着への影響

父親役割の母子密着への影響をみるために重回帰分析をおこなった結果、「母親との関わり」因子からのみ正の影響がみられた。これは、父親が母親とよく関わっているほど、母子が密着しているということを示しており、仮説1の“父親役割の下位尺度の中で、「母親との関わり」が母子密着に負の影響を与える。”とは反対の結果であった。父親が母親とよく関わることで、母子の分離が促進されると考えていたが、今回の結果からはいえなかった。しかし、父親と母親の関わりが多いほど、母子が不適切に密着するということは考えにくい。父親と母親の関わりが多いことは両親の仲の良さを示しており、それが母子の良好な関係につながっていると考えることのほうが自然である。今回の調査では、家族内の良好な影響関係があらわれたのではないだろうか。

4. 父親役割の母子密着・心理的自立への影響

父親役割の母子密着・心理的自立への影響をみるために重回帰分析をおこなったところ、男女で異なる結果が得られた。

まず、男性は父親役割、母子密着から心理的自立への影響を示すモデルの説明率が低く、家族との関係が心理的自立にほとんど影響を及ぼしていなかった。男性の場合は、家族以外の要因が影響していると考えられる。モデル自体は有意ではなかったが、今回扱った変数の中で、父親のリーダーシップはやや影響しているととれる数値が示された。男性の心理的自立に影響を与える要因はどんなものがあるのか、今後検討していく必要があると考えられる。また、父親が男性に与える影響は、心理的自立以外の面にあると考えられ、これについても検討が必要である。

女性の重回帰分析の結果では、母親との精神的な密着のみが有意に影響を示しており、父親役割の下位因子はわずかな影響が有意傾向で示された。つまり、女性は母親と精神的に密着しているほど心理的に自立しているということになる。この結果は仮説3と矛盾するものであった。このような結果となった要因として考えられるのは、母子密着尺度が、不適切な密着をきちんと測ることができていなかった可能性である。大東（2010）の研究などで、母子密着には健康的で、適切なものもあれば、病的で不適切なものもあることが示されている。今回の調査で用いた母子密着尺度が、健康的な母子密着を示すものとなっていたために、心理的自立に正の影響を与えるという結果になったのかもしれない。

5. 今後の課題

今回の調査では、仮説を立証することができなかった。その要因として大きく考えられるのは、母子密着の捉え方が不十分だったことである。健康的な密着と病的な密着の二つの面があることを考慮

した尺度を用いる必要があったと考えられる。また、母親との関係がどのようなものをたずねるだけでなく、回答者がその関係をどう感じているのかを考慮する必要もあったのではないだろうか。

本研究では、父親役割と母子密着が子どもの不適応状態に影響していることを想定し、不適応の指標として心理的自立尺度を用いた。心理的自立得点への影響があまりみられなかったのは、この尺度が不適応の指標として適切でなかったからかもしれない。また、今回の調査対象者は大学生であった。大学に入学する力があり、なおかつ授業にきちんと出席している者に回答者がかたよっていた。このことも、心理的自立得点に影響があまり示されなかった要因の1つであると考えられる。

5. まとめ

本研究では、父親役割が母子密着を介して、子どもの心理的自立に与える影響を調べた。しかし、これらの影響関係は強くなく、仮説は立証されなかった。とくに男性については心理的自立に対して、父親役割の影響も、母子密着の影響もほとんどみられなかった。しかし、女性については、父親役割の影響はほとんどみられなかったが、母子密着の影響はある程度みられた。さらに、父親役割から母子密着への影響も部分的に示された。このことから、女性においては、父親役割が母子密着を介して間接的な影響を与えている可能性が示唆されたと考えられる。今後は、母子密着尺度を不適切な母子関係を捉えられるものを用いることや、心理的自立以外の変数を検討することで、今回とは異なる結果が得られるのではないだろうか。

引用文献

- 柏木恵子〔編〕(1993). 父親の発達心理学：父親の現在とその周辺. 川島書店
- 柏木恵子 (2008). ジェンダー視点に立つ男性の心理学の課題（「日本の男性の心理学—もう一つのジェンダー問題—」 柏木恵子・高橋恵子編）. 友斐閣.
- 菅野信夫 (1987). カウンセリングと父性（「子どもの成長と父親」岡田康伸編）. 朱鷺書房
- 倉光 修 (1987). 父親像の変遷（「子どもの成長と父親」岡田康伸編）. 朱鷺書房
- 高坂康雅・戸田弘二 (2007). 青年期における心理的自立（IV）—心理的自立の発達的变化—. 北海道教育大学紀要, 57, 1, 17-30.
- 酒井彩子 (2004). 今日の家庭における父親の関わりと父親役割尺度の作成. 人間文化論叢, 7, 461-472.
- 大東映美 (2010). 母子関係と青年期の「甘え」との関連—高校生と大学生の比較研究—. 京都教育大学修士論文（未公開）.
- 田村 毅 (1996). 家族システムと父親不在. 子ども社会研究, 2, 18-32.
- 中野由美子〔編〕(1996). 子どもの発達と父親の役割. ミネルヴァ書房
- 松平久美子・三浦香苗 (2006). 中学生の父親存在感認識と情緒的自律の発達との関連. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 9, 106-117.
- 藤田達雄 (2003). 思秋期前の妻の孤独感と母子密着に関する研究—夫婦仲の良さと夫の仕事中心主義との関係に着目して—. 名古屋大学研究紀要, 41, 75-86.

ボウルビィ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論Ⅱ－分離不安－. 岩崎学術出版社 [Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, vol.2, Separation : Anxiety and anger*. New York : Basic Books.]